



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	異文化と適応援助(人格部門,わが国の最近1年間における教育心理学の研究動向と展望)
Author(s)	佐野, 秀樹; 呉, 賢治
Citation	教育心理学年報, 44: 67-73
Issue Date	2005-03-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/95503">http://hdl.handle.net/2309/95503</a>
Publisher	日本教育心理学会
Rights	著作権は日本教育心理学会に属する。

## 人格部門

## 異文化と適応援助

佐野 秀 樹・呉 賢 治

(東京学芸大学)

## はじめに

パーソナリティの研究は、多彩で個性的な研究の集まりである。統計的な手法を駆使し、すべての人間に共通する特性を扱う論文があるかと思うと、文学のように、特定の人物の生涯を深く分析した論文もある。統計的な研究手法をとる研究者が求めるものは、大規模な科学的理論かもしれない。一方、特定の人の分析を行なう人々の対象は、ある個人に起こった心的事実(事件)かもしれない。こうした研究を一つにまとめるのが非常に難しいのは、これまでの『教育心理学年報』の執筆者たちも繰り返し述べてきたことである。

人格に関する本稿は、このような欠点とも、また豊かさともいえる人格心理学の多様性について概観することにする。筆者らは現在、カウンセリングと異文化適応を中心に仕事を進めており、その視点を大事にしながら、パーソナリティ研究への興味、期待について言及したい。

まずカウンセリングと関係して、一般の人の生活にとってパーソナリティの理解がどのような重要性を持っているのであろうかという点である。家族や職場の中で人間関係がうまくいかない場合がある。例えば夫や妻のパーソナリティがどうしても理解できなくて困っている場合がある。職場で、同僚や上司のパーソナリティが理解不可能な場合もある。場合によっては、家族が壊れたり、仕事を止めなければならないこともある。このような素朴なしかし切実な疑問や悩みに対して、パーソナリティ研究はどのような答えを出してくれているのであろうか。

また、異文化と関連して、日本の社会が10年前と比べて大きく外部に開かれるようになった現在、日本人というものを外部との比較、交流の中で見ることや異文化適応の研究は、新たな日本人の人格研究の新しい視点を与えてくれる。したがって本稿においては、カウンセリングと異文化に関連したものが比較的強調されている。

今回扱った文献としては、本年度(2004)の『日本教育心理学会発表論文集』の人格に関わる発表をまず調査し、『教育心理学研究』『発達心理学研究』『心理学研究』『性格心理学研究(パーソナリティ研究)』『カウンセリング研究』『臨床心理学研究』『社会心理学研究』の各学会誌を参照

した。学会誌以外の雑誌に関しては、国立国会図書館NDL-OPACを使って雑誌記事索引一覧表示で、パーソナリティ、人格、自尊心、自我、自己のキーワードを使って検索した。文献の選び方については、なるべく幅広いものとするのを心がけた。

文献の引用についてであるが、本年度総会の論文集にあるものについては、発表者と発表番号のみを記載し、巻末の引用文献には記載を省略した(年号を記さずに、発表番号のみを記した)。

本稿ではまず、人格研究の中で人格を全体として捉える研究についてみる。人格というものは、大きく捉えると、どのように捉えることができるのかという点である。

その後、方法論的な点に注意を向け、人格の異文化研究や実験研究に目を向ける。こうした研究は、日常生活と距離をおき、普段とは少し違った角度から人格というものを捉えようとするものである。

さらに、人格の中心的な部分といえる自分ということに関する研究に触れる。これは、自尊心、自己愛などに関する論文である。また自我機能などに関連して、ストレスとそれへの対処、ソーシャルスキルの研究について検討を進めていく。

その後、児童・生徒のたび重なる事件などのために今注目を集めている児童・生徒の攻撃性についてみる。

また、少し視点を変えて、人格研究者とは関連があるが、他の領域、幼児教育とか福祉からみた人格心理学についての論文をみる。

そして、最後に、教育実践や臨床場面からの人格心理学の研究を検討する。例えば、攻撃性が目立つ子どもの指導などにおいて、人格心理学が現場でどのように使われているのかについて、知りたいからである。

## 1. 人格全体へのアプローチ

(1) ビッグファイブ等の研究 まず、人間のパーソナリティはいくつの要素から成り立っているのかというのは、因子分析を中心として人格心理学の主要な課題の一つである。この課題に関して、ビッグファイブの研究は、神経症傾向(N)、外向性(E)、開放性(O)、調和性(A)、勤勉性(C)の5つの因子を示しており、わが国でも村上・村上

(2001), 柏木(1997)等が出版されている。本年度この研究領域では、大野木(2004)が現在日本で標準化されている3つの性格検査の対応関係をみる研究を行ない、福島・名嘉・石津・與古田・高倉(2004)は看護者のバーンアウトとパーソナリティの5因子との関連を調べた。さらに塗師(PA046)は、Tellegenが臨床の観点から提唱するpositive valence, negative valenceの2つの因子を含めた7因子モデルと自尊感情との関連を調べた。

それと関連するものとして、山形・繁樹(2003)は精神病理学の領域で頻繁に用いられているCloningerの気質と性格の7次元モデルを用い、男子大学生を対象として実験を行ない、学業・授業・大学生活それぞれの領域において、意欲低下に關与するパーソナリティが異なることを示した。

今後、このようなパーソナリティの普遍的な研究がより進化、発展することが期待される。

(2) 伝記・日記分析 方法論は全く異なっているが、ビッグファイブの研究と同様に、パーソナリティを全体的に捉えるもう一つの研究があった。それは伝記、日記分析的研究である。この研究は特定の人間の生涯を見ながら、心理学的な分析をするものである。これまで、E. H. エリクソンによるルター、ガンジー、ヒットラーなどの研究や、G. W. オルポートの日記分析「ジェーンの日記」などがある。

本年は教育心理学会総会で伝記分析に関するシンポジウムが開催され、7名の著名な人物に関する発表があった。例えば、浦尾(PF046)は幕末において斬新な目標と信念の下に活躍したという坂本竜馬の持つ人格特性である主導性について述べ、主導性と彼の自由でのびのびとした家族関係との関連について分析した。また、中安(PF048)は、画家のP. ゴーギャンの芸術活動における野生的心性について述べ、芸術家としての同一性の苦悩と彼の本能的な欲求傾向について分析した。

こうした伝記分析を心理学的な理論に高めていく生育史心理学者の西平(2004)は、生育史心理学についての近著で、多くの歴史上の人物の分析の結果、人格の健全性、目標を持ち自律的な偉大性、物事を超越する超然性を偉人を見る3つの視点とした。西平は心理学における普遍性と個別性の問題に言及し、個別性の強い生育史心理学は普遍性にも通じる一方で、人間をみずみずしく描く点にその特徴があると指摘した。

さらに西平は、宮沢賢治の「億の巨匠」という言葉を引用しながら、偉人ではない通常の人の中にある偉大さについて分析し、人格の成長要因について検討した。その際、自己実現、個性化過程、アイデンティティの形成、十分に機能する人間などの概念の有効性を示し、説得力

のある議論を展開した。

## 2. 異文化に関わる人格心理の研究

異文化は、日本人の枠を超え、グローバルな心理学を求めていくものとして重要である。異文化心理学の一群は外国と日本を文化比較して、日本人の特性を明らかにしていこうとするものであり、本年度は以下のような研究発表があった。

(1) 東アジアと日本の比較 最近の日本では、セクシュアル・ハラスメントやいじめなどが多くなり、道徳性や倫理観についての検討が求められている。道徳性の発達については、これまでコールバーグの研究が著名であるが、明田ら(PF063からPF066)は、日本での道徳性の研究を進展させ、日本と韓国の児童・生徒の道徳性の発達について検討し、両国あるいは、男女での道徳性の違いをみいだしている。

また金(PD053)は、日本と韓国で、自己主張行動と自己抑制行動について比較し、二つの文化では、自己主張と自己抑制の関係が異なることをみいだした。首藤ら(PF008)は、夫婦と親子の葛藤場面における自己決定のされ方について、日本と中国とで比較して、中国と比べて、日本では役割の強調と自己決定が重視されているのを見出した。その他日本と中国の間では、青年期の愛着スタイルと社会的適応性についての比較(金政・大坊, 2003)、思春期の自我形成の比較(小川, 2003)があった。

(2) 異文化適応の研究 一方、増加する異文化で生きる人々の適応について(バイリンガルなど)の研究がある。現在、日本の学校にも外国人もしくは国際結婚家庭の子どもたちが通っているのは珍しくなくなった。フィリピン、南米など多くの国出身の人たちが日本で子育てをしている。

この分野では、江畑・曾・籾口・江川(1996)の残留帰国子女とその家族の日本への適応の大規模な研究があり、単行本として刊行されている。江畑らは残留帰国子女本人やその家族の日本への適応について理論的な考察、実証的なデータの収集と分析を行ない、大きな成果をあげている。

本年度、吉田(PC039)は、オーストラリア人と日本人の国際結婚の子どもが8歳で日本にはじめて来てから、バイリンガルになっていく様子をフィールド調査した。

鈴木(PB071)は、日本人の出生した子どもの50人に1人が国際結婚からのものであることを指摘して、バリ島に住む日本人との国際結婚の子どもたちの文化傾向、言語などについて調査し、文化は日本が優性で、言語は現地語が優性であることを報告している。

重松(2004)は多文化間カウンセリングに関する著作を

発表し、文化差の重要性を指摘しつつ、一方で文化還元主義の過ちも指摘した。重松は現在米国において、多文化主義がその勢力を増していると指摘し、多文化カウンセリングの米国における理論の検討をした後、重松自身の経験した日本における事例についてまとめた。重松はその結果から、クライアントと自分の世界観を理解すること、世界観のバランスをとること、受容と変化、軽さと重さなど多文化間適応とその援助に関する要因について検討をしているが、国際化する日本で、今後多文化の心理的問題（あるいは他文化共生）は重要性を増すと思われる。

臨床家である重松の主要な人間理解の方法は、クライアントの物語（ナラティブ）に注目することである。米国の *Journal of Personality* は、本年度の7月号で *Narrative Identity and Meaning Making Across the Adult Life Span* という特集を組んでいる。ナラティブ法は臨床と関係が深く、臨床現場での実践に主に使われていると思われるが、日本のパーソナリティ研究や異文化間適応に関しても、貢献が期待される。

### 3. 実験法と人格心理学

パーソナリティに関する質問紙、尺度研究としては、三好 (2003) の自己効力感尺度に関する研究、鈴木 (2004) の大学生の心配に関する尺度作成、辻本 (2003) の極端反応傾向に関する研究、山口・平田・高坂 (2003) の心理的距離に関する研究、田中・上地・市村 (2003) の Rosenberg の自尊心尺度に関する研究などがみられた。

一方、実験研究は数が限られていたが、大橋・潮村 (2003) は、否定的自己開示が開示者の自尊心に及ぼす影響について実験を行ない、顕在的自尊心と潜在的自尊心の二つの指標を用いて、その差異を示した。特に、連想法を使った潜在的自尊心の測定の方法は、本人が言語で回答する他の研究にはみられない研究法であった。

若尾 (2004) は、青年期のアタッチメントスタイルが不安喚起場面での親密な他者との行動に現れるのをみた。恋愛関係または友人関係にある18組が、不安やストレスを感じた状態で、実験室でパートナーとの相互交渉および短い分離と再会を経験した。パートナーは、自由な相互交渉ではアタッチメントに関わる行動の組織化は見られず、分離再会場面では、アタッチメントに関連した行動の組織化が見られた。青年のアタッチメントの個人差は、乳幼児と同様に親密な他者との分離再会における行動に現れることが示された。若尾は、アタッチメント研究において、調査法では扱うことのできない相互性、行動レベルの問題に触れた。

### 4. 自己概念などについて

(1) 自己概念などについての研究 パーソナリティ研究における自己に関する研究は、本年度も多くのものが行なわれた。自己に関する発表は、自尊心、自己概念など多くの違った用語が用いられ、その数も多かった。

自己に関する研究を、3つに分けると、1つは測定法の研究である。測定法について、鈴木・小川 (PA037) は、理想自己と現実自己を円を使って表現させる方法を考え、自尊心尺度を用いて自尊心の高低との関連を検討した。一方、小平 (PA042) は、自己不一致の測定に関して個性記述的な視点による方法の検討を発表している。

2つめは、大学生や高校生の自己形成に関するもので、自己を形成している年齢を捉えて、自己の形成要因について検討している。この時期の青年の自我同一性についての検討もなされた。

若原 (2003) は、現代青年の親への態度と同一視に関する西平のモデルについて述べている。青年が親への愛情と力を感じていなければならないほど、親を同一視していることがわかった。しかし、同一視の指標としての充実感と親への愛情や力を感じていることとの関係はみられなかった。

山田 (2004) は、大学生の自己形成について、質問紙と自由記述の調査をした。この結果と、適応感を測定するための自尊感情得点との組み合わせから自己形成の8つのパターンを作成し、個人が重要とする理想自己に対する6つの意味づけのパターンと実現に向けての具体的方策およびその希求の相違についての検討を行なった。

青年の同一視に関連した研究としては、田中正 (2003)、本田 (PD028) などがあり、青年の同一性の形成、自己形成に関連した研究は、須藤・青木 (2003)、小野寺 (2003)、井上 (PD007) 等の発表にみられた。

3つめは、自己のあり方と適応に関するもので、金子・本城・高村 (2003) は一般青年に見られる被害妄想的観念を自己関係づけとして捉えて、対人恐怖心性、抑うつ、登校拒否傾向との関連を検討した。一般高校生において、妄想観念は高頻度で体験されていることが明らかになり、自己関係づけと対人恐怖および抑うつ感情との正の相関をみいだした。

その他関連するものとして、セルフハンディキャップと完全主義傾向の関係について (丸本 PA038)、自己確証と抑うつとの関連について (稲葉・中谷 PA039)、セルフエスティームと身体不満、やせ願望について (鎌倉 PA086)、自己肯定感の関わりについて (久芳 PC028) などの発表があった。

(2) 自己愛について 昔の人から見ると、現代の日本人はナルシシストの傾向が強いのではないか。経済的に

は豊かになった現代の、特に青年の心理的な特徴の一つは、傷つくのを恐れるためか、人と触れ合うのをためらい、深い人間関係を持つとしない点である。また、引きこもる青年の多くは、自分を守るために、人と会うのを拒絶している。

自己愛に関する本年度の研究には、性格の自他評定による自己愛類型の特徴(小塩 PA050)、自己価値体験の様相からみた自己愛傾向と対人恐怖傾向(川崎・小玉 PA051)、新たな自己愛人格尺度の作成(谷 PA052)の発表がみられた。

## 5. ストレスと対処行動

現代はストレス社会と言われ、家族、学校、職場で多くの人がストレスを抱えながら生活している。現代のストレスは、物理的、経済的なものというより、心理的、人間関係におけるものが多い。そうしたストレスの種類を明らかにし、それに対する対処の個人差を明らかにしていく研究が本年もなされた。

被援助指向性を高めることが社会的適応につながり、精神的健康を促進すると考えられているが、森(PA107)は被援助指向性がストレス反応のどの段階に関わるかに注目し、被援助指向性の上昇がストレッサーに対しての認知やコーピングに対して影響があることを示した。また加藤(PA105)は、ストレスの存在によって、痩せ願望が食行動に対して通常とは異なる影響を与えることを示した。それ以外の発表としては、スクールカウンセラーと心の教室相談員のストレスに関する研究(山田 PA109)などがあった。

## 6. 攻撃性と関連した研究

最近の児童の事件(佐世保の女子小学生による殺人事件など)が、児童の攻撃性についての研究においては、多くの人の興味を集めると思う。米国の著名な発達心理学者である H. ガードナーの著書 *Developmental Psychology* の中には『ハエの王』(英国の小説家 Golding 著)が引用されている。この本の中身は、孤島に残された子どもだけの生活で自然に発生した子ども同士の残虐な行為(殺人も含む凄惨なグループ間の抗争)についてである。アメリカ合衆国では、中等教育でよく子どもに読ませる本だと聞かすが、日本の中等教育でも重要な書物の一つであろう。

現代の日本の社会でのいじめ、青少年の犯罪などをみると、子どもの持つ攻撃性が目立つ。

畠山・山崎(2003)は、幼児期に見られる攻撃・拒否的行動が、いじめとしての3つの要素を持つか検討し、その後、いじめに見られる幼児の仲間関係や保育者の対応について参与観察を使って検討した。子どもの自然ない

じめ行動の発生とそれを中止させる大人の役割を示している。

アタッチメントの研究のように、人間のパーソナリティ形成における幼児期研究の重要性は広く認められているが、この畠山・山崎による攻撃性の研究は、行動観察が比較的容易な幼児を対象に新鮮な視点を持っている。結論は他の世代の行動にも一般化が可能であろう。

その他の攻撃性については、芳賀らによる一連の共同発表(PA009からPA016まで)が調査用紙を用いて、規範意識、身体攻撃、言葉やものによる攻撃場面、言葉による間接場面、集団を通しての攻撃などについて発表をした。その他大学生の無気力感と攻撃性の関係についての発表(東山 PA087)があった。

攻撃性は臨床研究と関係が深い。臨床場面と関連の深い研究としては、田村ら(PA098)は境界性人格障害についての尺度作成を扱い、先述の金子・本城・高村(2003)は対人恐怖、抑うつ、登校拒否についての研究であった。また杉浦・杉浦(2003)は認知的統制と抑うつの関連について研究し、伊藤・丹野(2003)は公的自意識と対人不安との関係の研究を行なった。

医学誌『精神科』の平成15年度10月号では人格障害の特集を組んでいるが、今後、反社会的人格障害、反抗挑戦性障害などについてさらなる研究が必要であろう。

その他のパーソナリティ特性の研究として、強迫傾向についての研究(李 PA083)、スプランガーの類型論に関して価値志向性と苦手な他者像との関連(酒井 PA040)などがあった。

## 7. ソーシャルスキル

日記・伝記の研究について、特定の人的人生全体を人格心理学から見ていくものとしたが、そうした研究と対比すると興味深いものの一つに一群のソーシャルスキル研究がある。日記・伝記研究に対し、ソーシャルスキル研究者は、人生全体や人格特性ではなく、特定の社会的場面における社会的相互作用に注意していて、人間関係やストレスもやり方によっては、変化させ得る(行動変容)と考える。

本年度はソーシャルスキルに関して、スキルトレーニングの結果、効果があったとする論文がいくつかみられた。渡辺・山本(2003)は、中学生へのトレーニング効果の統計的な結果と適応指導教室での実践について報告している。池谷・葛西(2003)は、ソーシャルスキルトレーニングの結果、児童の自尊心が向上したとしている。それ以外にスキルに関して、いくつかの観点を持って検討した研究がある。

田中輝美(2003)は、主張性訓練に関して、怒りに関し

て内向性と外向性の人間では効果が異なるのではないかと仮説を検討し、特に内向性の人間の場合主張性訓練に関して考慮を必要とすることを明らかにした。

和田(2003)は、ソーシャルスキルが、自己評定によってのみ研究されている弱点を指摘し、社会的スキルとノンバーバルスキルを自分の評定のほか、親しい他人の評定によって測定し、それらがどの程度、心理的適応に関連しているかを検討した。

## 8. 関連領域と人格

文献を収集していく中で、心理学の専門家ではない、あるいは心理学以外の出版物で、パーソナリティに関するものがいくつかあった。これらは、心理の専門家以外(保育やケースワーク)の人がパーソナリティについて持つ興味・関心について知ることができるし、既成の概念や方法論にこだわらない新鮮な視点を与えてくれる。

倉戸・橘(2004)は、生誕後6ヶ月間の親子関係を観察し、どのように親子関係ができていくかについて観察研究をしている。この研究は写真を使い、乳児期の親子関係の様相を示し、その重要性を直観的に示した。

倉戸(2004)は大学生が認知している自分と両親との類似性について自由記述に近い質問調査をしている。この研究は、数量化による検討にまではいたっていないが、そのためか、数字で示されるものとは異なり、日常性のある言葉で結果が説明されているため、直観的に理解しやすい。

安達(2004)は、ソーシャルワークにおいて、土台としてのパーソナリティ理論の重要性について述べている。ソーシャルワークにおいて、ケースワーカーがどんな人間観をもっているかが、効果的なクライアント援助において重要であろう。安達はバイスティック(1996)の著作に言及し、ソーシャルワーカーの持つパーソナリティ観が、クライアントを人間として尊重するのに役立つことを示した。

## 9. 教育実践とパーソナリティ

パーソナリティの研究と臨床教育実践は独立したものであろう。しかしながら、現代の学校や日本社会で起こっている事件は、パーソナリティ研究が研究室での学術的理論だけでなく、応用面でもその成果を求められていることを示している。

現在の学校には数多くのパーソナリティ研究が活用できる場面がある。母親と一緒になければ学校に通えない子どもや、ちょっとしたことで友だちを殴ってしまう子どもなど、子どもの心の問題は多くの学校で日常的になっている。

本年度、パーソナリティ研究の中で、実際の子どもや人間について研究したものがいくつかみられた。

濱田・石川(2003)は、現在最も小学校などで問題となっている、子どもと暴力についての実践報告である。小学校などでは、例えばADHDや行為障害といったパーソナリティに関連した問題行動が増加している。このような問題にもパーソナリティの理解が重要となってくる。それは、人間のパーソナリティがどのように形成されているかの信念によって、教師などの働きかけが変わってくるからである。

子どもは指導されるべきものという受動的な考えをとる教師は、問題を起こそうとする子どもをコントロールしようとする。一方、子どもは自主的に問題を解決していくと考える教師は、子どもの主体性を大事にしようとする。濱田・石川(2003)は、行動療法からのアプローチで成功した。

長崎(2004)の研究は、自閉症という障害を持った子どもを対象に、セラピストとクライアントの関係を扱い、その中から子供のパーソナリティの発達をみようとしている。子どものパーソナリティの発生は愛着、二者関係などの親子関係に起因すると仮定した実践に関する報告をした。これは子どものパーソナリティの問題を、精神分析法と関連の深いダイヤディック(二者関係)から見たもので、興味深かった。

大迫(2003)は、児童自立支援施設における非行傾向を持つ小学生への治療教育について述べている。この子どもたちは、被虐待傾向を持っていた。そこで児童自立支援施設を環境(日課や遊び)として位置づけ、子どもたちが日々の生活の中で安心感を持つようにした。問題行動については、子どもがそれを表出できるように心がけつつ、修正していった。また自尊心を向上させることにも留意し、環境療法が有効であることを示した。

このような実践的な経験と理論(例えば、アタッチメントの理論、心の傷の理論)が切り結ぶところに、説得力のある研究が生まれる。大迫は、施設の職員の教育についても言及した。

松嶋(2003)は、非行少年の問題に関する更生保護施設職員の語りの事例検討を行なった。彼は、ある更生保護施設で、非行少年の更生、自立を支援する一人の実践家のインタビューを自分の観察記録とともに質的に分析し、家族の問題、親の責任、生活習慣のなさ、少年との関わりについてのテーマをみいだした。さらに、語る人の非行に対する考えの分析にもつなげた。

教育実践論文は、質問紙、尺度、相関などという方法論と比べると普遍性、科学性にかけるおそれがあるが、問題を持つ子どもとの長期にわたる実体験を理論化する

という面においては、調査、実験とは異なる長所と説得力を持っている。

### 最後に

本稿では、人格の全体的アプローチに関して、ビッグファイブの研究と日記、自伝分析について述べた。心理測定は、これまで軍隊における人事配置、企業における人事などのような、大規模な人事の選考、配置といった分野において役割を果たしてきたが、ビッグファイブは、パーソナリティ測定研究をさらに進めるものである。今後この分野の研究の進展は、パーソナリティの測定、アセスメントに大きな影響を与えるであろう。

日記・伝記研究は、現在のパーソナリティ研究の主要な方法ではないように見え、研究者や発表数も限られているようである。自伝や日記研究報告は見当たらなかった。しかし、ナラティブ法が注目される中で、自伝や日記研究も今後注目されると考えられる。

方法論については、実験法を使った研究の数が予想より少なかった。パーソナリティ研究者の関心が調査やカウンセリングといった他の分野に向いているのかもしれない。しかし、実験法には独自の価値がある。本年度のいくつかの実験研究においては、臨床で得られた理論の検証、新しい測定法などについての基礎的で、重要な検討がなされていた(若尾, 2004; 大橋・潮村, 2003)。

本年、ソーシャルスキルに関する多くの研究論文・発表があり、多くの成果が得られた。今後、いじめ、子どもの連れ去り、オレオレ詐欺等に対して自分の身を守るスキルの開発が早急に必要であろう。

筆者の最大の関心の一つである異文化の問題はどうであろう。異文化研究を進めるにあたっては、言語の違い(翻訳の必要)、海外の研究者との連携、協力など難しい問題も多い。また経済政治状況も絡み、政治体制の異なる国との研究協力は困難である。それにもかかわらず、本年度いくつかの異文化に関わる研究があった。その中のいくつかは、長年にわたって継続された研究の一部であり、日本でも異文化研究が根づいてきている。異文化適応については、本年度重松(2004)が多くの理論的な指摘をし、鈴木(2004)が報告したように、異文化に関わるアイデンティティの確立の研究が課題の一つであろう。

最後に筆者らは日常、教育相談をしているが、不登校などのカウンセリングをしていると、子どもの問題の背景に家族のパーソナリティの問題があることがある。家族同士で、お互いの性格がどうしても理解できず、不信感を持ったり、家庭内不和が長い間続いてきた場合である。

そうした場合、パーソナリティ心理学を学んでいる筆

者らが人間の性格についての話をしながら、家族員の性格について一緒に考えていく姿勢をとると、家族がお互いの性格を理解し、相手を受容しようと努力するようになる。その結果、家族の信頼感が増し、子どもの問題が改善することがある。またカウンセリングを進めていくプロセスそのものにも、人間の成長(パーソナリティの変容)に関するカウンセラーの理解力が、大きく関係する。カウンセリングの土台となるパーソナリティ研究の今後の成果に大いに期待したい。

### 引用文献

- 安達笙子 2004 Evidence Based Social Work Practice—土台としてのパーソナリティ理論の考察— 鹿児島国際大学福祉社会学部論集, 22(3), 1-17.
- バイスティック, F. P. (尾崎 新・福田俊子・原田和幸訳) 1996 ケースワークの原則 誠信書房. (Biestek, F. P. 1957 *The Casework Relationship*. Chicago, IL: Loyola University Press.)
- 江畑敬介・曾 文星・簀口雅博・江川 緑 1996 移住と適応—中国帰国者の適応過程と援助体制に関する研究— 江畑敬介・曾文星・簀口雅博(編), 性格と習慣の形成に及ぼす異民族間養子の影響—中国残留孤児の場合— 日本評論社, pp. 353-362.
- 福島裕人・名嘉幸一・石津 宏・與古田孝夫・高倉 実 2004 看護師のバーンアウトと5因子性格特性との関連 パーソナリティ研究, 12(2), 106-115.
- 濱田尚人・石川道子 2003 通常の学級で暴力を呈した高機能PDD児の1事例 小児の精神と神経, 43(3・4), 231-239.
- 畠山美穂・山崎 晃 2003 幼児の攻撃・拒否的行動と保育者の対応に関する研究: 参与観察を通して得られたいじめの実態 発達心理学研究, 14(3), 284-293.
- 池谷貴彦・葛西真記子 2003 児童の社会的スキルと自尊感情の向上に関する研究—ピア・サポート・プログラムの実践を通して— カウンセリング研究, 36, 206-220.
- 伊藤由美・丹野義彦 2003 対人不安についての素因ストレスモデルの検証—公的自己意識は対人不安の発生にどう関与するのか— パーソナリティ研究, 12(1), 32-33.
- 金子一史・本城秀次・高村咲子 2003 自己関係づけと対人恐怖心性・抑うつ・登校拒否傾向との関連 パーソナリティ研究, 12(1), 2-13.
- 金政祐司・大坊郁夫 2003 青年期の愛着スタイルと社会的適応性 心理学研究, 74(5), 466-473.
- 柏木繁男 1997 性格の評価と表現 有斐閣.

- 倉戸直実 2004 親子間パーソナリティ一致度の研究—大学生が認知している両親との行動の一致について—大阪芸術大学短期大学紀要, 28, 73-85.
- 倉戸幸枝・橘 セツ 2004 乳幼児期の人間関係の構築—誕生から6ヶ月—大阪芸術大学短期大学紀要, 28, 87-99.
- 松嶋秀明 2003 非行少年の「問題」はいかに語られるか:ある更生保護施設職員の事例検討 発達心理学研究, 14(3), 233-244.
- 三好昭子 2003 主観的な感覚としての人格特性的自己効力感尺度(SMSGSE)の開発 発達心理学研究, 14(2), 172-179.
- 村上宣寛・村上千恵子 2001 主要5因子性格検査ハンドブック 学芸図書.
- 長崎純子 2004 自閉症児の自我の発生一意図の形成・対人関係の変化との関連—龍谷大学教育学会紀要, 3, 27-42.
- 西平直喜 2004 偉い人とはどういう人か 北大路書房.
- 小川勝一 2003 思春期の自我形成の研究—日中比較—長野大学紀要, 25(2), 61-63.
- 小野寺敦子 2003 親になることによる自己概念の変化 発達心理学研究, 14(2), 180-190.
- 大橋早苗・潮村公弘 2003 否定的内容の自己開示が開示者の自尊心に及ぼす影響—顕在的自尊心と潜在的自尊心の測定—人間科学研究, 10(2), 33-48.
- 大野木裕明 2004 主要5因子性格検査3種間の相関的資料 パーソナリティ研究, 12(2), 82-89.
- 大迫秀樹 2003 虐待を受けた子供に対する環境療法:児童自立支援施設における非行傾向のある小学生に対する治療教育 発達心理学研究, 14(1), 77-89.
- 重松 S. マーフィ (辻井弘美訳) 2004 多文化間カウンセリングの物語 東京大学出版会. (Murphy-Shigematsu, S. 2002 *Multicultural encounters: Case narratives from a counseling practice*. New York: Teachers College Press, Columbia University.)
- 須藤博子・青木真理 2003 高校生の「自我同一性の感覚」について 福島大学教育実践研究紀要, 44, 145-151.
- 杉浦知子・杉浦義典 2003 認知的統制のストレス緩衝効果—抑うつとの関連—パーソナリティ研究, 12(1), 34-35.
- 鈴木公啓 2004 日本人大学生の心配について—Worry Domain Questionnaireに基づく日本語版WDQ(大学生用)の作成の試みを通して—パーソナリティ研究, 12(2), 73-81.
- 田中道弘・上地 勝・市村國夫 2003 Rosenbergの自尊心尺度項目の再検討 茨城大学教育学紀要(教育科学), 52, 115-126.
- 田中 正 2003 青年期男子における親の養育態度と自我同一性の関係 名古屋文理短期大学, 27, 1-4.
- 田中輝美 2003 高怒り内向者と高怒り外向者の主張性評価における特徴 心理学研究, 36, 149-155.
- 辻本英夫 2003 極端反応傾向と開放性・遊戯性・外向性 パーソナリティ研究, 12(1), 14-26.
- 和田 実 2003 社会的スキルとノンバーバルスキルの自己認知と心理的適応との関係 カウンセリング研究, 36(3), 246-256.
- 若原まどか 2003 青年が認識する親への愛情や尊敬と同一視および充実感との関連 発達心理学研究, 14(1), 39-50.
- 若尾良徳 2004 青年のアタッチメントスタイルと不安喚起場面における行動との関連 パーソナリティ研究, 12(1), 47-58.
- 渡辺弥生・山本弘一 2003 中学生における社会的スキルおよび自尊心に及ぼすソーシャルスキルトレーニングの効果—中学生および適応指導教室での実践—カウンセリング研究, 36, 195-205.
- 山田剛史 2004 理想自己の観点からみた大学生の自己形成に関する研究 パーソナリティ研究, 12(2), 59-72.
- 山形伸二・繁榊算男 2003 男子大学生のアパシー傾向とCloningerの気質・性格の7次元モデル パーソナリティ研究, 12(1), 30-31.
- 山口正二・平田修太郎・高坂則之 2003 生徒と教師の心理的距離に関する実証的研究—授業形態および生徒の呼称の視点より— カウンセリング研究, 36, 221-230.